

<幼児教育>

思いやりを育むための援助の工夫

～心を動かされる出来事の中で～

宜野湾市立はごろも幼稚園教諭 古波藏 愛 里

I テーマ設定理由

近年、少子化や核家族化、都市化、情報化社会の変化や人間関係の希薄化などにより、子ども同士で遊ぶことが減少し、人間関係が築きにくく、社会性も育ちにくい環境が広がっている。例えば、入園前の子ども同士のかかわりや、外で遊ぶ機会が減少し、テレビやゲームなどで遊ぶバーチャル体験の増加は、子どもが直接人に触れながら人間関係を築く機会を減らしている。このような状態での就学は、人間関係の形成が未熟なままでの就学となり、学習習慣の形成と相まって、人間関係を築いていく子どもたちの心の負担は大きい。幼稚園教育要領に「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」とあるように、幼小接続の視点からも、幼少期に人とかかわる力の土台を育むことが重要である。

幼稚園教育要領の領域「人間関係」には、「友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。」とある。その中で、「教師や友達と生活する中で、友達の表面的な特性に気付くことから、次第に、互いの心情や考え方などの特性にも気付くようになり、その特性に応じてかかわるようになっていく。そして、遊びの中で互いのよさなどが生かされ、一緒に活動する楽しさが増してくる。そのためには、友達と様々な心を動かす出来事を共有し、それぞれの違いや多様性に気付いていくことが大切である。また、互いが認め合うことで、より生活が豊かになっていく体験を重ねることも必要である。」とあり、人間関係を育むには上記の視点と本園の実態を照らし合わせて実践研究を進める必要があると考える。

本園の幼児の実態として、自ら意欲的に好きな遊びに取り組む幼児が多く、伸び伸びと園生活を過ごす姿が見られる。また、友達の刺激を受け「自分もやってみよう」と、目標を持って遊びに取り組む幼児も多い。一方で、自分の思いに固執する子、友達に自分の思いを伝えられない子、友達を「できる・できない」で判断する子、友達を仲間に入れることができない子など、様々な課題がみられる。

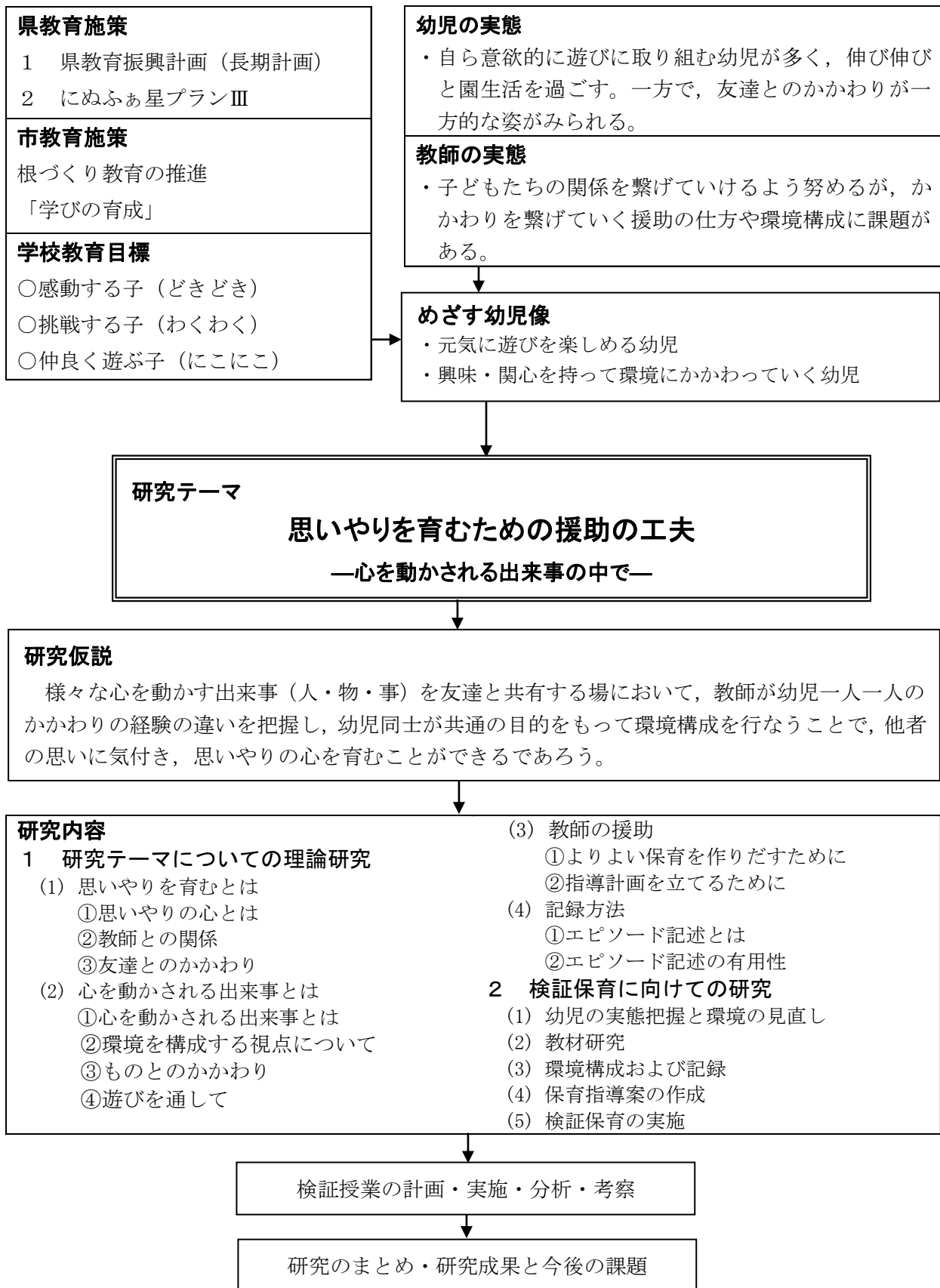
私自身の子どもたちへの対応を振り返ると、トラブルが起きた際、教師が仲介役となり、子どもたちの関係や遊びを繋ごうと働きかけると、教師がかかわることで納得しないまま友達を受け入れるという姿も見られた。表面的・形式的に受け入れる子どもたちの姿から、本当の意味で他者を思いやるための丁寧な援助ではなかったのではないかと考えさせられた。また、幼児一人一人の内面理解や人とのかかわりの経験の違いを把握し、援助する事の大切さも痛感した。

そこで、人・物・事への直接的・具体的な体験を通して、自分と異なる考えや思いをもった存在に気付くことで、幼児の思いやりを育みたいと思い、そのための一人一人に応じた援助の方法と環境構成のあり方を研究したいと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

様々な心を動かされる出来事（人・物・事）を友達と共有する場において、教師が幼児一人一人のかかわりの経験の違いを把握し、幼児同士が共通の目的をもって活動できるような環境構成を行なうことで、他者の思いに気付き、思いやりの心を育むことができるであろう。

Ⅲ 研究構想図



IV 研究内容

1 思いやりを育む

(1) 思いやりの心とは

思いやりとは「相手の立場に立って、相手の気持ちを感じとり、相手に共感できる能力」と『保育用語辞典第5版』に記されている。本園の幼児の実態から、相手の気持ちを考えようとしたり他者に共感したりする姿が見られる。一方で、「自分が」と自分の思いを前面に押し出す幼児の姿も見られる。自己中心性と幼児の思いやりの発達段階を『保育用語辞典第5版』から以下のようにまとめた。

自己中心性：自己主張は、決して「わがまま」なのではなく、むしろ自分を取り巻く世界を一度自分に中心化する動きであると見ることが出来る。その意味での自己中心性は、子どもが後に他児の思いを受け止め、思いやりを発揮し、仲間意識を高めていくための基盤として重要なものと考えられなければならない。

3～4歳頃：相手の表情を手がかりにして、相手の気持ちをくみ取ることが出来る。たとえば、泣いている子を慰めたりできる。

5～6歳頃：表情以外の相手についてのさまざまな情報を手がかりにして、自分とは異なる相手の感情を推測できるようになる。たとえば、自分はニンジンが好きだけどあの子は嫌いだから、ニンジンをもったら喜ばないだろう、と推測することができる。

このことから幼児は、他者を思いやることは発達段階の途中であり、自己主張を認めながら育むことと考えられる。幼稚園での様々な人とのかかわりの中で、他者に共感したり相手の立場に立って物事を考えようとする幼児を育みたい。

また『要領解説』の領域「人間関係」には、思いやりの心を育むために、「他者との様々なやり取りをする中で、自他の気持ちや欲求は異なることが分かるようになっていくにつれて、自分の気持ちとは異なった他者の気持ちを理解した上での共感や思いやりのある行動ができるようになっていく。」と記されている。

幼児の思いやりを育むためには、他者の存在が不可欠となってくる。園生活を通して、自分とは異なる思いをもった他者に出会い、様々なやりとりをする。『保育用語辞典第5版』に「相手から思いやられた経験が他者を思いやる気持ちと結びついていく。」とあるように、教師自身が幼児一人一人を大切に、思いやりのある行動とる、他者の感情や相手の視点に気付くようなかかわりをもつことが重要であると考えられる。しかし、幼児は物の取り合いや思いの食い違いによるトラブルが起きたとき、教師が仲裁役に入り相手の思いや考えを橋渡しして伝えたりするとすんなり解決することがある。「ごめんなさい→仲直り」が形式的に行なわれる場面も時々ある。幼児自身もそれを感じ、「とりあえず」ということもあるのではないのか。また、「教師がいるから」と表面的に解決する事もしばしば見られる。本当の意味で「他者の思いに気づいたり相手の立場に立って考える」ことには繋がっていないのではないのか。

そこで本研究では、「他者の立場に立つ」という結果としての思いやりではなく、幼児が他者とのかかわりの中で自己を発揮し、他者の存在に気づき、折り合いをつける過程（プロセス）を大切に活動を取り入れていくことで思いやりの心を育てていきたい。

(2) 教師との関係

幼児にとって教師との関係は、幼児が安心して園生活を送るための根本にあるといっても過言ではない。教師との信頼関係を基盤に、幼児の人や環境へのかかわりは広がっていく。武藤隆(2007)は「保育者とのかかわりは、友だちとのかかわりの土台ともなる。保育者との信頼関係によって、子どもたちの生活は安定したものとなり、積極的に環境にかかわっていくことができる。それは友だちとのかかわりにおいてもいえることであり、また保育者とのかかわりは友だちとのかかわりにおけるモデルにもなりうる。保育者との関係において味わう、受け止める・受け入れられる関係の心地よさは、友だちとのかかわりにおいて、相手の考えを理解する、気持ちを受け止めることにつながっていくと考えられる。」と述べている。

本研究では、教師が幼児一人一人を大切に、教師の思いやりのある行動が幼児のモデルになることを踏まえ、かかわっていく。幼稚園に入園して半年、これから幼児の活動の幅や友達との関係

は広がってくるであろう。幼児が安心して活動を広げ、新たな友達関係を築く姿を見守り、必要に応じて教師も輪の中に入り、援助を行う。その中で、他者の感情や相手の視点に気付くような働き掛けを意識しかかわっていくことを配慮していきたい。

また『要領解説』の「人間関係」では、「一緒に遊ぶ人数にかかわらず、一人一人の幼児が十分に自己発揮しながら、他の幼児と多様なかかわりがもてるように援助し、幼児が遊ぶ中で、共通の願いや目的が生まれ、工夫したり、協力したりする楽しさを十分に味わえるようにすることが大切である。」と記されている。教師は一人一人が自己発揮する姿を受け止め、友達とのかかわりに繋げていけるよう、友達という楽しさや喜びが共有できるよう配慮していく。仲の良い少人数でのグループから学級全体での活動に取り組んでいけるような環境構成を行なっていきたい。

(3) 友達とのかかわり

『要領解説』の領域「人間関係」の内容に、仲の良い友達だけでなくいろいろな友達と一緒に遊ぶことができるようになっていくためには、「幼児が人と共にいることの喜びや人とつながる喜びを体験する、自分らしさを十分に発揮し次第に仲の良い友達と思いを伝え合いながら、遊びを進めるようになる。その中で、自分の世界を相手と共有したいと願うようになる。そして、イメージや目的を共有し、それを実現しようと、幼児たちが、ときには自己主張がぶつかり合い、折り合いを付けることを繰り返しながら、工夫したり、協力したりする楽しさや充実感を味わうようになっていく。」と述べている。

このことから、幼児が友達との経験を重ねる中で、自分で考え、行動し、主張する姿を受け止め、いざこざや葛藤体験を繰り返すことで友達とのかかわりを深めていくと捉える。保育者が一人一人の幼児の姿や思いや考えを大切に、友達とのかかわりを通して他者の存在に気付いていけるよう援助していくことが重要であると考えます。

また、『要領解説』の領域「人間関係」では、「人とかかわる力の基礎は、自分が周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる人に対する信頼感をもつこと、さらに、その信頼感に支えられて自分自身の生活を確立していくことによって培われる」と記されている。さらに森上史郎(2009)は、人とのかかわりの基礎とは、「友達の中で自分というものに気づき、自分の世界を確かなものにしていくそのプロセスの中で、自分と同じ要求や世界(=共通項)をもつ友達を発見し、それを認め、受け入れることが人とのかかわりの第一歩となる。」と述べている。他の幼児や教師と触れ合う中で、幼児が体験することを以下のように捉えた。

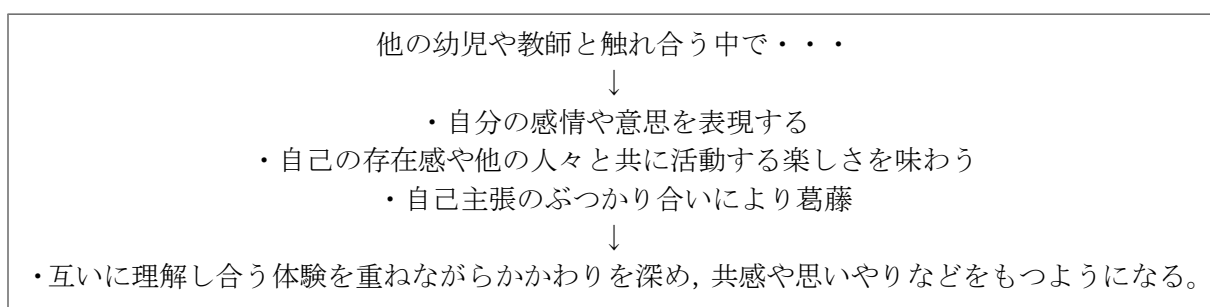


図1 思いやりをもつまでのプロセス

以上のことから、幼児は教師や他の幼児との信頼関係を基盤に、友だちの中で自己を発揮し、折り合いをつける経験を繰り返す中で、他者に対する思いやりを育むのでありと考える。

友だちとのかかわりのなかで、楽しい、嬉しい、悔しい、悲しいなどの感情体験を味わう。その際、幼児は友だちとすることの心地よさを味わったりその気持ちに共感してくれる相手の存在が、大きな心の支えとなり、感情のやり取りを基に、自分も友達の喜びや悲しみに心が向くようになっていく。

また、友だちとのかかわりにおいて、仲良く遊ぶ経験だけではない。遊びの中での自己主張のぶつかり合い等から生じるトラブルやいざこざも体験していく。

無藤(2007)は、「いっしょに遊んでいるなかでは、もちろん楽しい経験なかりではない。なかまからのさまざまな圧力もある。それでも、楽しかったという経験があるからこそ、その楽しさを求めて、子どもたちはいっしょに遊ぼうとするのだろう。いっしょに遊ぶなかで、なかまに対するさ

まざまな対応方法を身につけることができる。子どもたちに、なかまといっしょに遊ぶ楽しさをたくさん経験させたい。そうすることで、なかまとかかわろうとする気持ちを育むことができる。」と述べている。また、柴崎正行(2009)は、けんかを「幼児のけんかは同じ欲求をもつ友達の存在を知ったり、ぶたれた時の痛みを体感したり、自分の強引な態度に気付いたりするなど、幼児の社会性の発達に必要な体験をたくさん含んでいる」と述べている。好きや嫌いを超えた仲間と協同することを育み、支えていく要因を岩田純一(2014)は「子ども達と一緒にワクワクし、強い目的意識や意欲を共有するような保育環境」と記している。

本研究では、気の合う遊び仲間同士で始まった遊びが、それに関心や興味をもたまわりの仲間を巻き込みながら遊びが展開したり広がったりし、次第にクラスの多くが参加する活動へと広がっていくことを目指していく。友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じられるような活動を経験できる環境を構成し、そのことから友達とかかわろうとする気持ちを育むことができる。その根本にあるのは、「友達と一緒に遊ぶと楽しい」と幼児自身が思えることが大切だと考える。

2 心を動かされる出来事

(1) 心を動かされる出来事とは

岩田(2014)は「生活のなかで心が揺さぶられる体験や経験は大きく二つの体験の範疇に分けられる」と述べている。

- 1 子どもが心躍るような面白く、楽しい体験や、未知の出来事に出会った驚き体験、ワクワクするような新たな発見や気づきといった体験などであろう。それは、そのような出来事への関心や興味を他者(仲間や保育者)にも知らせ、他者と共有し合いたくなるような体験
- 2 「本来的には自他は異質であるがゆえに必然的に仲間と衝突すること」である。一つ目が心揺さぶられるポジティブな体験や関心・興味の共有をめざすとすれば、いざこざはネガティブともいえる心が揺さぶられる体験である。

この一つ目の体験を充実させ活動していく中で、二つ目の経験も重ねていくと考える。活動を選定する際、教師が課題を与えるのではなく幼児が「心躍るような」活動を取り入れていく。さらに友達との楽しい気持ちを共有することで、「友だちと一緒に遊ぶと楽しい」という気持ちが湧く。楽しい経験を通して、友達とかかわることができるよう環境を構成していく。

(2) 環境を構成する視点について

武藤(2007)は、環境を構成する視点を次のように述べている。

- ・子どもはどのような遊びに興味があるのか
- ・どのようなことにおもしろさを感じているのか
- ・その遊びを楽しむための身体・感情・知的発達はどうなのか
- ・遊びのなかで友だちとどうかかわっているのか
- ・その遊びを通して何を体験するのか

また、柴崎(2009)は子どもの生活や遊びが豊かなものとなるポイントとして以下のように述べている。

表1 子どもの生活や遊びが豊かなものとなる環境構成のポイント(柴崎正行)

1. 子どもの発達に即した魅力ある環境。自らかかわることのできる環境が身近にあること。人、物、場、空間、時間などが保障されていること。
2. 安全で、扱いやすく、多様性に富んだ遊具、素材があること。一人ひとりの発達や成長にあったもので、遊びを広げていける環境であること。
3. 自然豊かで、自然素材に富み、多様な遊びが作り出せる環境であること。

これらのことを踏まえ、子どもにとっておもしろく、意味ある環境を準備し、それらの出会いを子どもに提供していく。さらに、教材と環境を考える際には、「子どもの遊びや活動を十分に観察し、その興味や関心がどこにあるのかをとらえることが基本にある。」と述べていることから、幼児の遊びの中から、関心や楽しみ、願いがどこにあるかを丁寧に把握し、用意する教材の内容や場所、材料などの環境を構成していく。そのために、幼児の遊びや友達とのかかわりを観察し、他の教師とも連携しながら多面的に幼児の姿を捉えていこうと考える。

(3) 物とのかかわり

『要領解説』領域「環境」では、「生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。」と記されている。その内容として、「幼児が周囲にある様々な物に触発されて遊びを生み出し、多様な見立てを楽しむと、その遊びに興味をもった仲間が集まり、新しいアイデアが付加され、その物の性質や仕組みについて新たな一面を発見する。その発見を生かしてさらに遊びが広がり、深まるといった過程を繰り返す。このような流れの中で、幼児が自分のリズムで遊びを展開し、興味をもった物に自分からかかわる、多様な見立てやかかわりを楽しむ、思考錯誤をする、仲間と情報を交流するといったことを通して、物の性質や仕組みに興味をもち、物とのかかわりを楽しみ、興味や関心を深めていくことを踏まえることが大切である。」とある。

さらに、武藤(2007)は「ものとかかわりでは、子どもがものとかかわりを楽しみ、その性質や仕組みに気づいてものを使いこなし、かかわりを深めていく過程をていねいに見ることが求められる。そのためには、子どもが興味をもったものに繰り返しかかわることのできる時間と場所をつくり、じっくり遊び込める機会をもてるようにすることが大切である。自分やみんなのものを大切に扱うこと、身近なものや遊具を使ってあれこれ考えて工夫していく態度を身につけることも必要な経験である。保育者は、自らものを大切に扱う姿を子どもに示し、子どもたちが工夫しているときにはお互いの様子に注目するよう促したり、ときには自ら工夫して見せたりすることもある。」と述べている。このことを踏まえ、「もの」とのかかわりが豊かな環境を構成することで、幼児の活動が深まり友達の活動に刺激を与え、友達とのかかわりが深まっていくと考える。幼児同士が話合ったり、工夫し合ったり、協力する姿を見守り、必要に応じて援助していきたい。

(4) 遊びを通して

小田豊(2005)は、「幼児期は、幼児自身が自分の欲求に基づきながら、主体的に周囲の環境にアプローチすることが大切であろう。そして、その根源となるのは遊びであり、幼児の遊びの中には、成長・発達の糧となる体験が多く含まれている。」と述べている。また河邊貴子(2005)は、「幼児の遊びが充実するとは、個々の幼児が自らの発達に必要な経験を満たす遊びを展開しているときのことであり、次のような共通した特徴がある。」と述べている。以下のことに配慮しながら、幼児の遊びを見取っていき、環境を構成することが重要だと考える。

表2 幼児の遊びが充実する共通点

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">①一つの遊び(テーマ)に、ある一定期間継続して取り組み、集中している。②(遊びに取り組んでいる)幼児一人一人が遊びのイメージをしっかりとっている。③個々の幼児が自分のイメージを遊びの中で発揮し、遊びに必要なものや場をつくるために身近な環境に主体的に働き掛けている。④他児とイメージをものや空間の見立て及び言葉を通して共有しながら遊びを展開していく。 |
|---|

3 教師の援助

小田(2008)は、「個々の幼児は、環境の受け止め方や環境とのかかわり方がそれぞれ異なるのであり、幼児一人一人の発達の特性とは、その幼児独自のものの見方、考え方、感じ方、かかわり方のことに他ならない。教師は、こうした幼児一人一人の発達の特性を踏まえながら、その幼児らしさを損なわないように指導することが大切である。」と述べている。

(1) よりよい保育を作り出すために

本研究では、幼児が興味を示している活動からクラス全体へ広がることを想定し、保育を展開していく。その際、どのように幼児理解をするのか、よりよい保育をつくり出すためにどのような視点から何を捉えることが必要かを、文部科学省「幼児理解と評価」より、表3にまとめた。

表3 幼児を理解し、保育を展開するための視点

幼児を肯定的に捉える	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な幼児の姿を発達していく姿としてとらえる。 ・その幼児の持ち味を見付けて大切にする。・その幼児の視点に立つ。
活動の意味を理解する	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児自身はその活動において実現しようとしていること、そこで経験していること、経験したことが幼児の内面的成長にどのように関係するか理解すること。 ・なぜこうするのか、何に興味があるのかなどを感じとっていくこと
発達する姿をとらえる	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な生活の中で興味や関心が、どのように広げられたり深められたりしているか、遊びの傾向はどうか、生活への取り組み方はなど、生活する姿の変化を丁寧に見ていく。
集団と個の関係をとらえる	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児は教師との関係を基盤とし、自然に友達を求めるようになる。そして、友達関係の中で、互いの存在を認め合ったり、モデルになったり、ぶつかり合ったりするなど様々な体験をし、それを成長の糧とする。教師は幼児と生活を共にしながら、どのようなときにどのような育ちを期待して、一人一人に援助したらよいか、集団と個の関係をとらえて判断する。

(2) 指導計画を立てるために

文部科学省「指導と評価に生かす記録」より、幼児理解を深め、指導計画を立てるための視点を以下の表のようにまとめた。

表4 幼児理解に基づいて指導計画を立てるための視点（指導と評価に生かす記録）

<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の言動から、遊びの何に面白さを感じているのかを読み取る。 ・そこでものや意図とどのような関係を結んでいるのかを理解するとともに、課題も見いだす。 ・その課題を乗り越えるのにどのような経験が必要なのかを考える。 ・その経験を満たす可能性のある環境（遊び・活動を含む）は何かを考え、教師の場に応じた役割を考える。（仲間になって動く、環境を提案・提示する等） ・結果として遊びや幼児一人一人の状態がどのように変化するかを見る。

4 記録方法

本研究において、幼児の変容を捉えるために、ビデオでの記録とエピソード記述（鯨岡峻 2005）を用いる。

(1) エピソード記述について

① エピソード記述について

エピソード記述とは、『保育用語辞典第5版第5版』によると「ある特定の具体場面を、そこに関係する人物の行動やかかわりの展開に留意して、できるだけ詳しく記述したもの」であり、「現場のなかで立ち上がる問いについて、その問いとの関連のなかで、その現象の何らかの『意味』が見えてきたときに浮かび上がり、描き出されるもの」とされている。さらに「保育実践から立ち上がる様々な問題についてその本質に接近していくための質的研究の資源の一つとなるもの」である。

② エピソード記述の有用性

鯨岡は「エピソードとは、何らかの点で保育者の心が揺さぶられた場面、つまり、保育者が描きたいと思ったもの、あるいはおのずと描かずにはおれないと思ったものである。事実経過を書き出したものではなく、子どものつぶやき、保育者の思い、子どもたちと保育者との心と心の触れ合いが読み手に伝わるのがエピソードである。」と述べている。さらに「心動かされる出来事（略）を描くことを通して、子ども一人一人の心の動きが分かり、自分の対応が自分に見えてきて、保育の振り返りに繋がる。」と述べている。

このようなエピソード記述を用いて保育を記録し、幼児の内面の変化を見取るとともに、自分自身の保育実践を客観的に振り返り、教師の援助の工夫に繋げていく。

V 検証保育

検証保育指導案

平成 27 年 1 月 15 日 (木)
男児 12 名 女児 16 名 計 28 名
保育者 古波藏 愛里
外部講師 吉葉 研司

- 1 主な活動名 廃品を使って、「ピタゴラ装置」を作ろう！
- 2 ねらい
○友達と共通の目的に向かって取り組み、協力して作り上げる楽しさを味わう。
○友達と考えを出し合い、自分たちで活動を進めていくおもしろさを味わいながら、自分なりの力を発揮する。
- 3 内容
・製作に必要な物を友達と協力して準備をする。
・友達の気づきや発見に共感し、活動を発展させていく楽しさを味わう。

4 活動設定の理由

今回のピタゴラ装置作りは、子ども達の活動から引き出した活動である。始めは、ペットボトルのキャップを転がし競争している姿が見られた。そこへ、教師が段ボールを 1 枚与えると、段差に置いて傾斜をつけて転がし始めた。それから、子ども達は「ここに落とし穴があって、ジャンプ台があって、急カーブがあって…」と、イメージの中で友達同士楽しみ始めた。さらに空き箱を 3 個程与えると、穴を空けたり繋げたり仕掛けを作る子ども達。教師も一緒にイメージを確認しながら遊んでいると、「これはピタゴラ装置だ！」と言って、楽しんでいる。

仲間と一緒に遊ぶ面白さを知り、仲間のイメージに触発され、さらにイメージを広げ活動を展開させていく楽しさを感じることができるピタゴラ装置作りの活動を通して、心を動かされる出来事を友達と共有することで、他者の感情や相手の視点に気付くことができるようになる。子ども達の中から自然発生的に生まれたこの経験を通して、幼児の思いやりを育むことができるであろうと考え、本活動を設定した。

(1) 教材観

本時では、廃品を活用した「ピタゴラ装置作り」という共通の目的を持ち、友だちとイメージを共有し、工夫したり試したり、協力して遊びを進める楽しさを感じながら活動を進めていく。活動を進めていく中で、子ども達同士で様々な考えや意見を出し合いながら、自分達で活動を工夫し、広げていく活動だと考える。

廃品という身近にある素材や教材を利用するという点で、幼児自身が普段の生活の中で友だち同士遊びを進められるよう設定した。また、ビー玉は、思ったより転がったり転がらなかつたり、ビー玉が通る道を予測し、楽しみながら繰り返し試行錯誤できるため、作った物の組み立て方やコースの傾斜の度合い等で、違った動きで流れ落ちるビー玉は幼児にとって魅力的な素材であると考えた。

(2) 幼児観

本学級の幼児は、これまでの検証期間を通して、自己を発揮し、友達と活動を進める楽しさを感じる姿が見られた。友達と協力して取り組む喜びや楽しさを味わう体験をした子どもたちは、自信を持って生活を進めており、自分達で友だちの輪を広げようとしている姿も見られた。

一方で、友だちの中で力関係ができ、遊びを引っ張っている子に自分の思いを伝えられない、伝えるが思いを受け入れてもらえない等、主体性をもって活動に取り組むことができない幼児もいる。また、相手の思いや考えを受け入れられずに自分のしたい遊びを強いる場面も見られた。

そこで、本時では幼児が夢中になって取り組むことができる活動を設定し、友達の気づきや発見に共感することから思いやりの心を育みたいと考える。

(3) 指導観

活動を進めていく中で、自分らしさを発揮し、もっているイメージや思いを十分に表現できるよう援助していきたい。主体性をもって活動できる中で、友達のイメージに出会い、共有し、実現するために話し合い、協力して活動が進められよう環境を構成していく。幼児同士で活動を進めていこうとする姿を認め、必要に応じて思いや考えを引き出していけるよう配慮したい。またイメージした物を形にできるように、十分な時間と廃材や教材の準備をし、工夫したり協力したりする経験の中で、心を動かされる経験ができる遊びを展開できるように支援する。

指導案 平成27年1月15日(木)		せせらぎ組 男児12名 女児16名 計28名 保育者：古波藏 愛里	
＜主な活動名＞ 廃品を使って、「ピタゴラ装置」を作ろう！			
研究 仮説	心を動かされる出来事（人・物・事）を友達と共有する経験において、教師が幼児一人一人の経験の違いを把握し、幼児同士が共通の目的を持って活動できるような環境構成を行うことで、他者の思いに気づき、思いやりの心を育むことができるであろう。		
ね ら い	○友だちと共通の目的に向かって取り組み、協力して作り上げる楽しさを味わう。 ○友達と考えを出し合い、自分たちで活動を進めていくおもしろさを味わいながら、自分なりの力を発揮する。	内 容	・友達の気づきや発見に共感し、活動を発展させていく楽しさを味わう。 ・製作に必要な物を友達と協力して準備をする。
環境構成 材料：空き箱、ストロー、カップ、ペーパーの芯、トレイ、段ボール（切ったり折り曲げたりできる厚さの物や、高さをつけられるような空き箱）ペットボトルのキャップ、爪楊枝、輪ゴム、画用紙、割り箸、ビー玉 教材：はさみ、段ボールカッター、セロハンテープ、ガムテープ、マジックペン ・幼児がイメージした物を形にできるよう、十分な素材を用意する。			
時間	○予想される幼児の姿	★教師の援助	評価項目 (幼児の姿)
10:00	○前日までの活動を振り返る ○自分たちが作っている装置を紹介する。 ○友達の意見や考えを聞いて、イメージをふくらませる。自分のイメージした物を教師に伝えようとする。 ○はさみやカッターを使う際の安全確認をする。	★クラスで前日までの活動を振り返り、今日の活動について子どもたちから思いや考えを引き出していけるような質問を投げかける。 ★紹介した装置について、次にどんな風にしたいかを質問したり子どもたちからアドバイスを引き出したりできるような質問をする。 ★友だちのアイディアを認め、共感できるよう、教師がモデルとなって子どもたちの思いを受け入れる。 ★幼児がイメージした事を丁寧に汲み取り、他の幼児にも刺激となるよう配慮する。 ★はさみは持ち歩く時や使わない時はキャップをする等、安全指導する。 ★段ボールカッターを使う際は、教師と一緒に使う。	◇自分の思いや考えを伝えているか。 ◇友達の考えや思いを受け入れ、活動を進めているか。 ◇自分のイメージした物を表現しようと、夢中になって取り組んでいるか。
10:15	○ピタゴラ装置作りをする ○自分のイメージしている物を製作する。 ○グループの友達と話し合いながら製作する。 ○イメージを共有できずに、トラブルになる子もいる。 ○友達と意見を出し合い、協力したり分担して作る様子を見守る。必要に応じてアドバイスしていく。	★自分の思いや考えを伝えられずにいる子は、教師が間に入り、思いや考えを引き出し、一緒に伝えたり伝えようとする姿を見守る。 ★思いを伝え合う姿を見守りながら、友だちの意見の良さにも気づけるような声かけをし、受け入れる・受け入れられる経験ができるようにかかわっていく。 ★意見が違ったときやトラブルになった時は、その場で自分たちで話し合っ解決できるよう言葉をかけ、子どもたちのやり取りを見守っていく。折り合いをつけることができた時には認め、難しい時には教師が間に入り、解決法を考えていけるような投げかけをしていく。 ★一人一人がイメージを形にできるように、素材や用具の特性や扱い方を知らせ、必要に応じて援助する。 ★工夫できたところや、頑張って作り上げたことを褒め、自信につなげていく。	◇イメージを共有しようと、話し合う姿は見られるか。 ◇必要な物を話し合い、協力して準備しようとしているか。 ◇繰り返し試し、ビー玉が転がる面白さを感じているか。
11:00	○片付けをする。 ○袋や段ボールに片づけ、名前を書く。	★個々のアイディアが活かされて遊びや活動が進められるように、教師も話し合いに加わりながら、遊びのイメージを確認したり、ヒントを与えたりしていく。 ★みんなで力を合わせたという気持ちが持てるように活動の展開を工夫し、友だちと協力してやり遂げた満足感や充実感を味わえるようにする。 ★作った装置が壊れないよう、テーブルに置く。 ★材料はテーブルの下へ、グループでまとめて片付ける。	◇失敗した際、どうして失敗したのかを考え、話し合い、試行錯誤する姿が見られたか。 ◇翌日の活動につながるよう、自分たちで進んで片付けをしているか。
評価 の 観 点	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児が興味・関心を抱くような話の進め方をしていたか。 ・幼児が自己を発揮し、充実感を味わえるような時間の確保、素材の準備ができていたか。 ・幼児が友達と活動を進めていくなかで、教師の援助や声かけは適切であったか。 ・教師が幼児の心を動かされる場面（楽しい、おもしろい、きれい、すごい、気持ちいい、不思議だ、びっくり、うれしい、悲しい、さみしい、悔しい等）を捉え、教師自身が幼児の思いに共感し、また幼児同士が共感しながら活動ができるような援助ができたか。 		

VI 仮説の検証

1 これまでの活動

本研究では、一人一人の個性や役割が発揮され、活動を通して友達によさや個性を認め合うことのできるよう幼児の遊びを観察し、環境構成、教師の援助を行った。環境を構成する視点においては、どのような遊びに興味があるのか、面白さを感じている場面、友達とどのようにかかわっているのか、遊びを通して何を体験するのかなどの理解をもとに環境構成を行った。教師が意図した活動ではなく、子どもたちが興味を持っている遊びを汲み取ることで、友達と好きな遊びを通して他者を理解しようとする心が育つと考える。また、教師が幼児の人間関係に積極的にかかわり直接かえていこうとするのではなく、幼児同士がものを媒介としながら友達との関係を築くことができるよう配慮した。

環境構成においては、常に保育室にあるものに加え、子どもたちの活動の様子を観察しながら、活動が深まったり広がったりすることで子ども達の人間関係にも刺激を与えられることを想定し、教具や教材を準備する。

<12月10日(水)～12月22日(月)街づくりに至るまでの流れ>

最初はB児のスポーツカー作りから始まった活動である。B児の遊び仲間も加わり、しだいにまわりの他の子ども達も巻き込み、その遊びのイメージの共有化が拡大していく様子を下の図に表した。遊びの共有・展開が、友達とかかわりを広げていく。B児の活動をきっかけにクラス全体の活動へ展開することを見通し、環境を構成した。

幼児が興味を示していることから活動を広げたいと思い、B児に積極的にかかわりをもつ。B児が夢中になれる遊びから刺激を受けた子ども達の遊びの広がりを下の図1で示した。

段ボールでスポーツカー作り

段ボール等でB児が興味のある「スポーツカー」を製作できるような環境構成をすることで、B児は自分の遊びに夢中になり、自分らしさを発揮する姿が見られるだろう。そのために、教師はB児から電車の話(興味のあること)を引き出す。

●段ボール・空き箱・ペーパーの芯・段ボールカッター・ガムテープ・マジック・セロハンテープ・図鑑(車)

ガソリンスタンド作り

B児たちのスポーツカー作りが盛り上がりを見せ、そこへ惹きつけられるように、他の幼児が「一緒にやりたい」と活動の仲間に加わるようになった。少しずつ人数も増えてきたので、活動の幅を広げたいと思い、「ガソリンスタンドも必要じゃない？」と投げかける。すると、子ども達が自分の知っているガソリンスタンドのイメージを話し始めた。ガソリンスタンドにあるガソリンの種類、機械の形、色、車を停める場所には線が引かれている等、様々な意見が飛び交った。その中で、子ども達はどんな廃品を使って再現しようか話し合う。再現が難しくアイディアが出ずに行き詰まった時は教師が必要に応じてヒントになるよう声をかけた。

●1メートル程の長い棒(ガソリンスタンドの屋根を支えるため)、ひも

ケーキ屋さん、花屋さん、コロッケ屋さん、おうち作り

スポーツカー作り、ガソリンスタンド作りで盛り上がっている子ども達。同じく教室で、粘土遊びでケーキを作っている子ども達がいたので、教師が段ボール箱を切り拓いてカウンターを作って提供する。すると、「ケーキ屋さんだ!」と喜ぶ。その後、自分たちでケーキ屋さんの建物の製作に取りかかり、絵を描いたり飾り付けをしていた。その頃から「町作り」と称して花屋さ

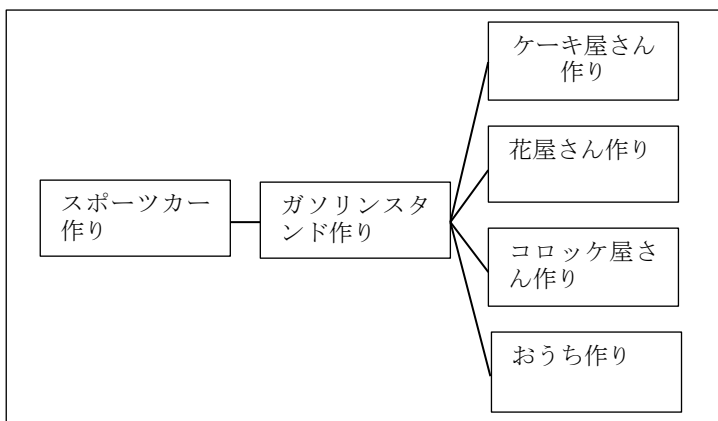


図1 幼児の遊びの広がり

んやコロケ屋さん、お家作りをするなどクラスの子ども達に取り組んでいく姿が見られた。

●折り紙・白紙・絵の具・絵の具を入れるもの（ペットボトル）、筆・はけ）

<1月6日～1月15日 ピタゴラ装置作りに至るまでの活動の流れ>

この活動においては、A児達が遊んでいたペットボトルの競争をヒントにし、活動を展開させていった。その活動の展開の様子を右の図2に表した。

ペットボトルのキャップで競争して楽しむ姿

冬休み明け、子どもたちが廃品を使って製作するであろうと思い、クラスに様々な廃品を置いておく。(すると、ペットボトルのキャップに興味を示したA児達。室内外でペットボトルのキャップに回転をかけて勝負をして楽しんでいる。

●空き箱、ペーパーの芯、ペットボトルのキャップ、ひも、等)

段ボールで傾斜を作りキャップを転がして楽しむ

●約30cm四方の段ボールの切れ端を提供する。

すると、遊戯室にある段差に当てて傾斜を作り、「坂道」と名付け、キャップを転がし始めた。傾斜を下ると、ペットボトルのキャップが転がる速度が変化することに面白さを感じている子ども達。これまでの競争に、「傾斜を下ると勢い余ってキャップが転がらないかもしれない」という予測できないドキドキ感を楽しんでいる様子である。教師も一緒にかかわり、楽しさを共有することができた。

空き箱・ペーパーの芯を組み合わせ、迷路を作る

子ども達が傾斜を転がるキャップを見て、想像の世界の中でキャップをジャンプさせたり落とし穴に落としたりと楽しむ姿が見られる。そこへ、トイレットペーパーの芯、牛乳パック、卵のパックを準備し提供する。すると、自分たちが思い描いていたものを形にしようと製作し始めた。「迷路」と称し、楽しむ子ども達の姿が見られた。

ビー玉を転がして楽しむ

作った迷路でペットボトルのキャップを転がして遊んでいるが、キャップだと重みがなく傾斜の途中で止まったり倒れてしまうと転がらなくなってしまう。そうなると子ども達は、もっと早く転がしてみようと試みるが、上手くいかない。するとB児が「ビー玉とかないの？ビー玉だったら転がる気がするんだけど…」と教師に尋ねてきた。教師は「ビー玉」という素材に繋がりたいと思っていたので、あらかじめ準備してあった。子ども達にビー玉をあげると、適度な重みのあるビー玉は作った迷路をスムーズに流れていった。ビー玉が流れる様子を見て「ピタゴラスイッチだね！」と結び付けたB児。その後、A児と一緒に「僕たちで作ったからピタゴラ装置って名前にしよう！」と、話し合って名前をつけた。名前をつけたことでさらに関心が深まり夢中になって遊び始めた。

●ビー玉

学級全体でピタゴラ装置作りへ取り組む

A児達のピタゴラ装置をクラスで集まった際、紹介する。A児たちの表情からは「面白いものを作った」という自信を持っている様子が伺える。実際にビー玉を転がすシーンでは、「3, 2, 1, GO!」というかけ声でビー玉を転がすため、カウントダウンをしている間は、静かになるという子ども達を感じている緊張感を私自身が感じる事ができた。その様子を見ていた子ども達は大変興味を持ち、「自分たちも作りたい!」と思い思いに教師に話し始めた。製作に取りかかる前にA児たちに装置作りに至るまでの流れを教師の質問によって引き出し、子ども達に刺激となるよう話しをした。話しを聞いている間も子ども達の表情や姿勢からは、「話を聞きたい」と

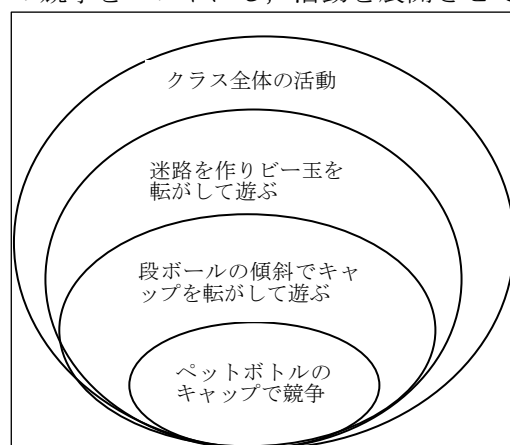


図2 幼児の遊びの展開の様子

いう意欲的な姿が見られた。

そして学級全体で取り組む。活動の中で教師の「どうしたらいいかな？」という問いをきっかけに、子ども達同士で様々な考えや意見を出し合いながら、自分達で活動を工夫し、広げていく姿が見られる。子ども達のやりとりを見守りながら時に励ます姿勢を心がけた。仲間と一緒に遊ぶ面白さを知り、仲間のイメージに触発され、さらにイメージを広げ活動を展開させる姿が見られた。

2 ビデオ記録とエピソード記述から幼児の姿を捉える

本研究では、研究テーマに沿った保育実践を行い、幼児の姿やその変容から検証を行う。その対象を「クラス全体」と、著しく変容の見られた幼児3名の姿をもとに検証を行う。「抽出児A」「抽出児H」とした。エピソードでは、幼児の変容が見られた言動や行動を波線「~~~~~」で示す。

●入園当初～6月頃までの幼児の姿

クラス全体

集団生活の経験がある子がほとんどで、入園当初から同じ保育所や学童の子と一緒に好きな遊びを見つけ、楽しむ姿が見られた。園庭が芝生養生のため入ることができない状態であるが、室内でブロックを使って恐竜や車を作り楽しむ姿が見られた。また、粘土遊びでは思い思いに自分のイメージしたものを作る姿が見られた。また、遊戯室では大型積み木を使ってお家を作ったりままごとをしたりして楽しむ。時々、大型積み木の取り合いでトラブルになることもあった。

抽出児A

生き物に対してすごく知識が長けていて、「先生、〇〇って名前の生き物知っている？とってもかっこいいんだよ！」といきいきと話す姿が見られた。また、生き物の図鑑を広げ、自分の知っている生き物と照らし合わせたり新しく知った生き物について知識を深めようとしていたりする姿が見られた。

5月頃にはA児がする遊びに興味やあこがれを持つB児C児D児。A児がする遊びを真似したり一緒に遊んだりする姿が見られる。この頃からA児が遊びを取り仕切るリーダー的な存在となり、活動が進められる様子が見られるようになった。その一方で、友達に遊びを指示したり友達に対して悪い言葉を言うことを強いる場面が見られ、教師に注意されることもあった。その都度教師と話し合い、相手の思いを一緒に考えると理解はしているようだが、相手の心情や考え方に自分自身で気づいてほしい。

抽出児H

入園当初から幼稚園での生活を楽しんでいる姿が見られた。母親に「幼稚園行くのドキドキするけど、楽しい」と、毎日期待をもって登園する姿が見られた。登園してからはぬり絵やパズルを楽しむ。絵を描くことが好きで、描いた絵を母親に見せ「お家に飾ってもらうんだ。」と話していた。特定の友達はいないが、自分の好きな遊びを積極的に行う姿が見られる。絵の具で絵を書く事を楽しみ、同じ遊びをしている友達と一緒に会話をしながら楽しむ姿が見られた。6月頃には気の合う友達ができ2人で遊ぶ姿が見られるようになった。

2学期頃からH児が友達に遊びを指示したり強制する場面が見られた。教師が介入すると表面的には解決するが、場面が変わると同じような状況が見られる。形式的に解決させるのではなく、H児自身に他者の立場に立ち思いやりを育んでほしい。

●12月10日

「スポーツカーを作るんだ！」

朝の好きな遊びの時間、教師とB児の会話である。

教師「B児は電車が好きだったよね？どんな電車が好き？」

B児「N700系！」

教師「N700系ってどんな電車？」

B児「白い線と青い線が入っているの！顔がかっこいいんだよ！（夢中になって話す）」

教師「じゃあ今度つくってみる？」

B児「いいねー！でも作るんだったらスポーツカーがいい！今も鞆に入っているんだよ！マフラーもつけたい！今のマフラーは丸じゃなくてこんな形なんだよ！（手で四角の形を表す）バンパーも作りたい！」（イメージを膨らませて熱く語っている）

教師「じゃあどんな物が必要か教えてね。段ボールとかガムテープとか・・・教えてね。」

B児「うん！」

と、楽しみにしているB児の姿が見られた。

考察

A児との遊びの中でのB児は、自分の思いを抑え活動している姿が見られる。自己発揮できる活動を通して、A児にもB児にも友達との関わり方について振り返ってほしいと思い、B児に働きかけた。B児が自分の興味のある活動に夢中になることで、A児と遊びたいが自分の活動もしたいという葛藤が生まれ、その中で自分の思いを伝え、互いに刺激し合えるような関係を築いてほしい。

●12月11日

B児の葛藤

B児とC児はA児が登園するのを待っている。

教師「B児さん、昨日言ってた車作ろうか？段ボールあるよ！」

B児「うん！作りたい！」

B児は教師と一緒に車を作り始める。そこへA児が登園する。A児はB児が車作りをしている様子を見ながら所持品の始末をする。C児がB児は車作りをするからブロックでは遊ばないことを伝える。

A児「B児！ブロックで遊ばないんなら、仲間に入れてやらないからな！」と、B児に話し部屋から出て行った。B児はA児が出て行ったあと、表情を曇らせ、A児の姿を目で追いかけている。A児の事が気になり、遊びに集中できない様子。（A児が来る前までは、アイデアを出したり活動的だったが、A児が出て行ったあとはそわそわしたり、A児がいる遊戯室を見ている。）

一緒に取り組んでいる子ども達が窓はどうするのか、ライトはつけるのか等、どんな風に進めていくのかを教師に聞くので、教師は「B児さんに聞いてみて？」とB児のイメージに合わせて進めてほしいと思い、B児のイメージを引き出したり子ども達同士声をかけて進めていけるよう配慮する。B児はこれまで、A児の遊びについていく側だったが、友だちに頼られて自分の遊びを進めていくという経験は初めてではないか・・・B児は友だちに聞かれると自分のイメージを話し、どんな風に作るかをいきいきとした表情で話す様子が見られ、再び遊び始めた。B児の作った車をきっかけに、ガソリンスタンドを作ることへ発展していき、さらに盛り上がり始めた。

そこへA児が部屋へ来た。

A児「ブロックやらないのか？」

B児は、A児の問いかけに対し答えずに遊び続けている。A児はB児のいつもとは違う態度に少し戸惑っている様子。A児は折り紙を始めた。（どうしたらいいのかわからなかったのであろう。）

教師「A児さん！ガソリンを入れる部分、ブロックで作ることできないかな？ガソリンスタンドにはそれが要なんだよね。どう？」

A児「(嬉しそうに) いいよ！でもブロックじゃなくて、折り紙で作るね！ハイオクと〜ディーゼルと〜・・・あとなんだっけ？とりあえず、ガソリンスタンドには3種類あるから3つ作るね！」と、折り紙で作りはじめた。その様子を見ていたB児。

B児「この車はハイブリットだから、ガソリンいらないよ！でも、少しは入れるから・・・よろしくね！」（A児が自分の遊びに入ってきてくれたのがうれしかった様子）

A児は完成したものをガソリンスタンドと繋げる。A児はガソリンスタンドを作りたくなったようで、仲間に入れてもらい、製作を始める。（B児は自分の遊びに夢中である）



考察

毎日、A児が登園するのを楽しみにしているB児。しかし今日は、教師の働きかけによりいつもとは違った一日のスタートとなる。A児が登園するまでは、B児の発言からは主体的で楽しんで活動するB児。教師は、主体性をもって活動してほしいと思いB児に対して積極的に働きかける。B児の言動や行動を認め、一緒に活動している友達と繋げていくと自信をもって活動するB児の姿が見られた。しかし、A児が登園してからはB児の行動や表情に変化が見られた。「A児のことが気になるが、自分の活動も進めたい…」という葛藤する場面が見られた。B児にとっては夢中になれたこの経験によって生まれた葛藤は、大切な経験となったといえるだろう。また、A児にとっても、「自分の思いで活動をするB児」という姿が映り、A児の存在を考える機会となったと考える。

またA児の「ガソリンスタンド作りの仲間に入れてもらう」という行動は、A児自身が友達の活動に心を動かされ「一緒にやってみよう」と思えた場面だと捉える。これまでのA児を振り返ると、A児が友達の遊びに仲間入りする場面はほとんど見られなかった。今回の場面でA児が友達のよさに気づき認める姿が見られたと捉える。

● 1月8日

キャップで競争

ペットボトルのキャップを使って競争をしているA児、B児、C児、D児。みんなで並んでキャップを転がし、楽しんでいる。教師が段ボールを1枚、準備する。すると、段ボールを遊戯室の段差に置き、滑り台を作る。キャップを滑らせ、みんなで楽しんでいる。

A児「ここにジャンプ台があって・・・ヒュー！ってジャンプして♪」

B児「ここには落とし穴があって落ちて・・・」

と、それぞれが様々な仕掛けをイメージしながら、楽しんでいる。そこへ、教師がトイレットペーパーの芯、牛乳パック、卵のパックを準備する。

C児「トンネル作るっ！」

と言って、牛乳パックの底を切り取り、繋げてトンネルを作りだした。

D児「トンネルいいね！俺は卵のパックを来て、でこぼこ道を作ろう！」

と、取り掛かろうとする。すると、

A児「それじゃダメだよ！全然いいアイデアじゃない！」

D児「・・・(聞かないようにしているのか、何も言わずに下を向いている)」

教師「D児さんいいね！面白いものができそうじゃない？ほらっ。こうやって・・・」

と、D児のイメージしていたものを実際に滑り台においてみる。

A児「ああ・・・いいね！」

D児は嬉しそうな表情をしている。その後、白いスポンジをちぎり、雪道を作り始めた。すると、

A児「リーダー決めようぜ！」

と言うと、声からリーダー決めをしようとじゃんけんをする。その結果、B児がじゃんけんで勝った。

A児は少し表情を曇らせたが、「B児すごいな！」と声をかけていた。

その後、活動していると、

A児「先生！前さ、リーダー決めたんだよね！だから俺がリーダーになるんだ！」

教師「ん～・・・でもじゃんけんしたんじゃない？」

その言葉を聞いて、A児はその場を離れて行った。次は、お菓子の箱を利用し、操縦機やリモコンを製作している。

A児、B児「ピタゴラスイッチミサイルだ～！」

と名付けて、ペットボトルのキャップを転がし、滑り台やジャンプ台、雪道をどうやったらキャップが滑ることができるかを試し始めた。リーダーという役割にこだわったA児だったが、遊びを引っ張るような様子は見られなかった。



考察

B児たちがペットボトルのキャップを想像の世界で遊んでいる姿から、友達のイメージを認めなが

ら自分の活動を展開させている様子が見られた。そこには「いーね！」(友達の活動を認める言葉)「じゃあ俺は・・・」(他者のアイデアを認め、さらに展開させる言葉)等の声があった。共感し合う中で活動がどんどん広がり、面白さを感じている姿が見られた。

しかし、A児はC児のアイデアを認めようとはしなかった。他者のアイデアを認めることで、「自分にないもの」ということを認めるからなのではないか。また、A児は「リーダー」というポジションにこだわりを持っている。じゃんけんで決めたはずだが、後に「自分が」と言ってリーダーを宣言している。A児の姿から、リーダーになって「遊びをコントロールできる立場」という安心したポジションがほしいのだろうと捉えられる。それは、今回の場面で見られるが、「友達の思いや考えを認められない」というB児の気持ちが言動から捉えられた。B児には、他者のイメージに出会い、認めながら活動を進めていく楽しさを経験してほしいと思う。

●1月9日

「ピタゴラ装置だ！」

朝の好きな遊びの時間、A児、B児、C児、D児は、昨日製作したピタゴラスイッチミサイルの仕掛けで、ペットボトルのキャップを転がして楽しんでいる。すると、A児から

B児「ねえ先生！これ、ペットボトルのキャップだけではなくて、もっと転がるものない？ビー玉とかあったらいいのに・・・」

B児はテレビの番組でビー玉を使っているのを思い出し、教師に提案する。教師があらかじめ準備していたビー玉を渡すと、興奮気味に様々な仕掛けを使って転がし、試し始めた。始めは、長い筒の中にビー玉を転がし、楽しんでいる。筒の中に、ビー玉が引っ掛かる場所があるらしく、中に入れても自分達が予想しているタイミングでビー玉が転がってこない。その予測できないタイミングに面白さを感じたらしく、何度も何度も試すA児たち。その様子を見ていたF児とB児が仲間に入れてほしいとやってきた。A児は、教師の様子を伺いながら、B児はA児の様子を伺いながらではあったが、仲間に入れた。それからF児とB児も加わり、ビー玉を流して楽しんでいる。

するとB児が、

B児「この箱に穴を開けてビー玉を入れてみよう！」

と製作をし始めた。ビー玉がどうやって転がったら面白いかを考えながら製作している。そこへA児たちも一緒に取り組む。ビー玉だけではなく、ガムテープの芯も転がしてみようと提案するF児。ガムテープの空き芯は、重みがないためなかなかうまく転がらない。そこへ、

B児「先生！こうやって転がってほしいんだけど・・・どうしたらいい？」

B児が教師にガムテープの芯が転がってほしい様子を伝え、イメージを伝える。教師が子どもたちの考えを引き出そうとヒントを与える。

B児「分かったー！！こうしたらいいんじゃない？」

さらに傾斜をつけると転がると考え、大きめの段ボールを組み立て、そこにB児たちが作っているものをくっつけると、B児のイメージ通りだったらしく、すぐにガムテープの芯が転がり始めた。

みんな「やったー！！」

勢いよく転がっていく様子を見て、大喜びである。何度も繰り返し転がし始めた。それに加え、A児も一緒にビー玉を転がし始めた。それからガムテープとビー玉の転がり方を繰り返し試す姿が見られた。



クラス活動にて

朝のひとつきでは、子どもたちにA児たちが作っているピタゴラ装置を紹介した。A児、B児、C児、D児、E児、F児の6人にクラスのみんなに紹介してもらおう。6人は一度片づけた装置を組み立て始めた。その間に教師が、子どもたちにこれまでのA児たちの活動を話す。

しばらくしてA児たちが装置の組み立てを終え、いよいよビー玉を転がそうとスタンバイをする。子ども達はとても興味深々な様子で静まりピタゴラ装置をじっと見ている。みんなでビー玉を転がすまでにカウントダウンをする。

みんな「3, 2, 1, GO!!!」

子どもたちのドキドキした緊張感，どうやって転がるのかという期待感が教師にも伝わってくる。いざビー玉を転がすと・・・1度目はうまくコースを流れない。子ども達から「もう1回！もう1回やってみよう！！」と声上がる。2度目，3度目と転がすが，コースから外れてビー玉が途中で落ちてしまう。すると，じっと見ていたR児が，「この段ボール曲げたらいいんじゃない？」と提案し，曲げてみる。

みんな「3，2，1，GO！！」

これまでより長い距離をビー玉が流れた。さらにH児が「ここも曲げてみよう！」と提案する。

みんな「3，2，1，GO！！」

そこでやっとビー玉が最後まで流れることができた。

みんな「うわあ～！！」

歓声上がり喜ぶ子ども達。A児たちが作ったものをみんなで試し，失敗し，どうすれば転がるかを考え，工夫し，さらに試し，ゴールできたという満足感を感じたようだ。それと同時に，自分達はどのように作るか期待している姿が見られた。

教師「よし！みんなも作ろうか。」

という教師の声かけでそれぞれが作り始めた。子ども達は一人一人が自分のイメージを形にしようと製作に取り掛かる。その中で，友達と自分のイメージを伝えあい，進めていく姿も見られる。

●段ボール，牛乳パック，空き箱，ペーパーの芯，段ボールカッター（幼児用），カッター（教師用），割りばし，輪ゴム，爪楊枝，ガムテープ，セロハンテープ



考察

B児は活動をどんどん展開させていく。「こんなものがあつたら・・・」「こんな風になりたい・・・」等，B児の発言からは，面白くするために工夫しようとする姿が見られる。そのB児のアイデアを認めながら活動を進める姿が見られた。さらに，仲間に入れてほしい友達が来た際，教師の顔を伺うA児，A児の表情を伺うB児の様子が見られた。B児は活動しながらもA児の様子を気にしているのだろう。しかし，F児B児が入るとさらに活動は展開する。ガムテープの空芯を転がしてみようと，子どもたちは試行錯誤する。教師がヒントを与えるような声かけをすると，みんなで話し合い，様々な方法を試す。上手くいくと歓声をあげ，喜びを共有している姿が見られた。

クラスでの活動の際，A児達の製作しているピタゴラ装置を紹介した。ピタゴラ装置のワクワク感は，見ている子ども達を感じ，教師にも伝わってくる雰囲気があった。教師は，ビー玉が上手く転がらない経験も含め子ども達に見てほしいと思い，失敗した際も見守った。子ども達の中からアイデアが生まれ，それを受け入れるB児。緊張感とワクワク感を共有した子ども達の雰囲気は一体感を感じた。成功するとクラスのみんが喜ぶ姿を見て，照れたような嬉しそうな表情を見せた。さらに自信をつけたB児の姿が見られた。

●1月15日 検証保育

「ピタゴラ装置作り」

クラス全体

先日から取り組んでいるピタゴラ装置作りは楽しんで取り組んでいる様子が見られる。一緒に取り組んでいる友達とイメージを伝え合いながら，製作に取り組む子ども達。上手くビー玉が転がると友達と一緒に喜び歓声をあげる姿も見られた。また，ビー玉が上手く転がらなかった時は，友達と一緒に考え，装置を直し，またビー玉を転がしてみる。試行錯誤する姿が見られた。感動を共有する経験を重ねていく中で，折り合いをつけながら活動を展開させていく様子が見られた。

さらに，友達の装置に目を向けどんな風に作ったかを聞いたり装置を合体させるグループもあった。友達同士「こうしたい」「どうしたらよいか」「ああしたほうがよい」と意見やアイデアを出し，自分達のピタゴラ装置を工夫しながら作りあげていく様子が見られた。



H児

H児と一緒に活動しているK児は、転がしているビー玉を追いかけたり装置作りのアイデアを提案したりと積極的な姿が見られる。始めは、グループのみんなで取り組んでいた活動であったが、H児の思いで活動が進み出してきた。H児からは、「これはやっちゃだめ!」「ここはこうしてって言っているでしょ!」等、指示をしたり友達の装置作りへのアイデアを制限し始めた。

しばらくして、装置作りをしているK児に、

H児「ガムテープ ♪ガムテープ ♪」

と、面白い言い方をして道具を持ってきてもらうよう声をかける。K児は、話をしているH児の顔を見ることなく何も反応はしない。黙々と装置作りに取り組んでいる。何度もガムテープを求めたので、I児がガムテープを持ってきた。この後から、K児、I児の表情に変化が見られる。

H児「(ビー玉を流す準備をして) いくよ! いくよ! (ビー玉を転がして) ゲームだ! ゲーム!」

と、一人楽しんでいる様子が見られるH児。しかし、K児、I児の硬い表情からは、楽しんで活動に取り組んでいるようには見えない。表情は固くH児の声に反応せず、製作をしているのである。しばらくして、ビー玉の流れが上手く転がらない部分に、K児は段ボールを使って、傾斜の部分を固定しようと試し始めた。なかなか段ボールと傾斜の部分を組み合わせることが難しく、テープを貼る場所をかえたり段ボールの向きを変えたりと試行錯誤している。K児が道具を取りに行くと言ってその場を離れた。道具を取り戻って来ると、使っていた段ボールをH児が持っている。H児はK児が使っている様子を見ていなかったようで、段ボールをどう使おうか考えている様子。

K児「(黙ってH児の様子を伺う) その段ボール、K児が使っていたんだ。」

H児「でもH児も使いたいもん!」

K児の話を書く様子はなく、段ボールをどうしようか考えている。K児はH児の話を書く態度から諦めたらしく、別の活動に取り組んだ。K児は、H児に自分の思いを否定された、H児の思い通りに事が進んでしまった、と感じたのではないかと推察される。その状態のまましばらく活動は続いた。様子を見ていた教師は、K児とI児に、主体的に活動してほしいと思い、声をかける。

教師「(装置を指して) ここでビー玉が止まっちゃうね。どうした良いと思う?」

K児・I児「・・・(黙ったまま何も答えない)」

教師「2人の力を貸してほしいな。」

すると、2人はペーパーの芯を丁寧にガムテープで繋げ始めた。

教師「2人は丁寧に繋げているね。繋ぎ名人だねっ!」

教師は2人に自信を持って活動してほしいと思い、声をかけた。2人は教師の声かけで自信を持ったのか、会話する声が大きくなり自分達で話しを進めながら活動を進める姿が見られた。そこにH児の姿はなかった。

考察

クラス全体的に、自分らしさを十分に発揮しながら友達とイメージや目的を共有しながら活動を進めていく姿が見られる。ピタゴラ装置では自分のアイデアや友達のアイデアを繋げていくことができ、「友達と一緒に活動を進めながら他者のイメージに出会う」という場面が多く見られた。

H児のグループへは、積極的に教師が介入した。H児の様子を伺いながら活動を進めていくK児達には「友達と一緒に活動を進める楽しさ」を感じてほしいと思いK児達が自分自身の活動に自信がもてるよう声をかけた。H児には友達が自己発揮をしている姿を見て、他者の存在に気付くことで思いやりを育むことができると考える。今回K児とI児の「繋ぎ名人」という言葉はH児も聞いていた。H児はその後のK児達の活動へは入ってこなかったことから、K児達の活動を認めざるを得ない状況だったのではないかと考える。

3 検証のまとめ

本研究では、幼児が物を媒介とし、人とのかかわりを深めていくという、人間関係を環境構成の面からアプローチしていった。活動の根本にあるのは、幼児が「夢中になって取り組むことのできる活動」である。その活動の中で、「心を動かす出来事」に出会い、友達の思いや考えに気づけるような環境・教師の援助を行った。「ピタゴラ装置作り」という活動は、クラスのほとんどの子が興味を示し、

夢中になって取り組む姿が見られた。一人一人が、個性や役割を發揮しながら友達との関係に変容を捉えることができた。ピタゴラ装置を作る過程では、自分の興味に沿って自由にかかわる楽しさや面白さ、驚き、感動等の心を揺さぶられる経験をした幼児の姿が見られた。

当日の活動では、前日までの活動で流れを把握し、見通しをもって活動に取り組もうとする姿が見られた。気の合う友達と作ったグループの中で、思いを伝え合いながら活動を進めていく子ども達の中には、アイデアが浮かばなかったり行き詰まったりしているグループもあった。イメージを広げるために、教師が「どうしたらいいかな？」等、問いかける。教師の問いをきっかけに、子ども達同士で様々な考えや意見を出し合いながら、自分達で活動を工夫し、広げていく姿も見られた。子ども達のやりとりを見守りながら時に励ます姿勢を心がけた。仲間と一緒に遊ぶ面白さを知り、仲間のイメージに触発され、さらにイメージを広げ活動を展開させる姿が見られた。

その中で、上下関係ができていくグループには積極的に教師が介入した。従っている子ども達に、「自分の活動に自信をもって取り組む」ことができるように、子ども達の活動を認める声かけをしたりその子の活動を周りに知らせ、受け入れられるような雰囲気作りをするよう心がけた。始めは友達の様子や表情を伺って自信がなさそうに活動をしていたが、教師の声かけや周りの友達に認められながら活動を進める経験を重ねる中で、活動に積極的な行動をしたり声が大きくなり楽しむ姿が見られた。

抽出児とその周りの友達との関係については、抽出児が自分の活動に夢中になることで、活動を通して互いに思いや考えに気づく姿が見られた。また、友達のアイデアに出会い認め合う姿から、固定化された幼児の上下関係の差が縮まったと言える。互いを認め合う活動の中で、他者の思いに気づいたり相手の視点に立って物事を考えたり姿も見られた。

Ⅶ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 幼児が遊びの中で主体的に周囲の環境にアプローチできるよう教師が環境構成を行うことで、固定化された幼児の友達関係に変容が見られた。
- (2) 幼児は心動かされる活動の中で、同じ体験をした友達の言葉と自分の経験が一致し、言葉の豊かさに繋がる経験となった。
- (3) 一人一人の幼児が十分に自己發揮しながら活動を進める中で、自分と異なったイメージや考え方をもった存在に気づき、また友達のよさに気づく幼児が増えた。
- (4) 幼児理解をし、教師のかかわり方への理解を深めることができ、多くの視点から幼児の姿を捉えることができた。

2 今後の課題

- (1) 活動の「結果」を求めるのではなく幼児が育つ「過程」を大切にし、その過程の中で育つ幼児の変容や育ち、学びを丁寧に汲み取ることが大切である。
- (2) 幼児の課題に焦点を当て変容を捉えるのではなく、その幼児の遊びの姿を教師が受け入れ、他の幼児へ繋がるよう援助し、受け入れたり受け入れられたりする経験を多様に活動に取り入れられるように活動を計画的に行う。

<主な参考文献>

- 岩田純一著 2014 『子どもの友だちづくりの世界』 金子書房
無藤隆 2011 『保育の学校』 フレーベル館
柴崎正行・若月芳浩 2009 『保育内容 環境』 ミネルヴァ書房
文部科学省 2008 『幼稚園教育要領』 フレーベル館
無藤隆監修／岩立京子編 2007 『事例で学ぶ保育内容 領域 人間関係』 萌文書林
無藤隆監修／福元真由美編 2007 『事例で学ぶ保育内容 領域 環境』 萌文書林